

五木寛之氏が2011年に出版した『下山の思想』を読んだ時、なるほどと思った。日本は上り詰めたから、これからは下り坂に向かうが、下山は豊かで、味わい深い道である。戦後、日本の経済は急激に発展を遂げたが、これからは下山を楽しもうとの趣旨であった。

今年の4月、神戸女学院大学名誉教授で、思想家・武道家の内田樹氏が、「撤退」について15名に寄稿を依頼し、『撤退 歴史のパラダイム転換にむけて』という論集を出版している。依頼の手紙には、「国力が衰微し、手持ちの国民資源が目減りしてきている現在において『撤退』は喫緊の論件のはずであるにもかかわらず、多くの人々はこれを論じることを忌避しているように見えるからです」と書いている。依頼に応えた論者は五木氏のような楽しさはないが、興味深い3名の要旨を紹介し、私のコメントを少し書きたい。

『人新世の「資本論」』の著者、斎藤幸平氏は、「崖に落ちることはわかっているのだから、終わりのない利潤獲得競争から『撤退』し、持続可能な社会へ転換しようではないか。こうして、資本主義や経済成長至上主義からの『撤退』として、『脱成長』が提唱されるようになってきているのである」と述べる。脱成長を実行するためには、資本主義に緊急停止ボタンを押さなければならない。その際、国家の力が不可欠であるが、国家に依存するだけではなく、市民が国家を監視、規制する力を養う必要がある。斎藤氏は、「下からのコモン（公共財）」の再生、市民による相互扶助の実践が求められると言う。

青木真兵氏は、古代地中海史研究者で、私設図書館を開き、障害者の就労支援をしている人である。彼は「撤退とは、下野することと見つけたり」と言う。下野は権力から降りる敗北という印象があるが、現代における下野は「社会の外を経験すること」で、社会的価値や評価から距離を取り、それらに価値を置かない経験をすることである。自殺者はかなり減ってきているが、諸外国と比べると、自殺死亡率は高い状態である。この背景は、社会が作った標準信仰に縛られ、選択肢が狭められているからではないか。他者のニーズや社会の常識を気にせず、自分はただの「生き物」と徹底的に主観を認める。生き物の部分を取り戻す時、大らかに肯定できる自分の生を見出す。青木氏は、撤退・下野ばかりせよとは言っていない。社会に戻ったり、出て行ったりする自由があってよいと言う。青木氏が言うように、撤退を下野と捉えると、標準信仰から解放され、標準の真偽が見えてくるのではないか。

疫学専門の津田塾大学教授の三砂ちづる氏は人口減を取り上げ、出生率の低下を報告している。そして、避妊問題から、ブラジルの女性たちが憧れるラキアドウーラ（卵管結紮術）の永久避妊法の話に及んでいる。避妊は、妊娠を回避するための性行為であるが、三砂氏は、避妊の話が空回りしているような気がし始めたと言う。子どもを持ちたくないから避妊するというわけではない。少子化になったのは不妊という病理的なことのためでもない。子どもが生まれるためには、男女の性交渉が必要なのだが、今、日本人は当たり前のセックスを忘れつつあるのではないか。セックスレスであることが少なくない。若い世代がセックスせず、結婚してもセックスレスになるような状況では、政府がいくら少子化を食い止める対策を進めても、人口減少に歯止めはかけられない。三砂氏は、若者たちが性行為しない状況を「最も根っここのところからの撤退」と表現している。私の周りでも、結婚を望まない青年、セックスレスの夫婦の話聞く。人間が作ってきた文化、文明が子孫を残そうとする動物的エネルギーを奪ってしまったということなのか。